

# 絵本の世界シリーズ

## 目次

第1集『きんぎょがにげた』	P2-3
第2集『ぐりとぐら』	P4-5
第3集『はらぺこあおむし』	P6-7
第4集『スイミー・フレデリック・アレクサンダとぜんまいねずみ』	P8-9
第5集『しろくまちゃんのホットケーキ』	P10-11
第6集『くまのがっこう』	P12-13
＊『季節のおもいでシリーズ第4集「ぐりとぐら」』	P14-15
＊その他の絵本に関連する切手	P16

## 絵本の楽しみ

絵本を読む声は子どもに安心感を与え、肌のぬくもりや匂いを感じるにより親子の親密感が高まり信頼関係が強くなる。また、子どもは読み聞かせによって親の愛情を感じ、子ども自身の自己肯定感も養われる。現代では、親子が触れ合う時間は貴重だ。

絵本は子供向けのイメージがあるが、大人にとっても魅力が詰まっている。シンプルな言葉で紡がれた絵本は、すっと心に入ってきて、大人にも響く。

絵本の中では、どこにでも行けて誰にでも変身できる。また、自分の中にはなかった視点を発見して、世界が広がる機会にもなる！

## 「絵本の世界シリーズ」について

様々な切手のデザインを見て「わ～可愛い！」と思った。

「こんな素敵な切手があるよ。」と紹介したくて製作した。

最近では...

絵本の読み聞かせがYouTubeなどの動画へ。

手紙を送る文化がLINE等のメールへ。

郵便を出す際に最近では切手を貼ることも少なくなった・・・。

郵便局の窓口には、可愛い切手、季節を表す切手…。様々な美しいデザインの切手が販売されている。絵本の世界が描かれた切手もしかり。

こんなに素敵な切手の存在が、子育て中の保護者の「ほっと一息」に繋がったり、家族の日常会話での話題になったり、子どもたちが絵本を楽しむきっかけになればとっても楽しい。嬉しい。

小さな切手が持つ温かくて深いメッセージ。

**切手は幸せを運ぶ**



# きんぎょが にげた

絵本の世界シリーズ第1集 2021.12.2

## 絵本の世界シリーズ 第1集

The World of Children's Picture Book Series No.1

### きんぎょが にげた

五味太郎 作



JOH. ENSCHEDÉ STAMPS 平成29年12月20日



出版社 福音館書店  
五味 太郎 作  
初版年月日 1982.08.31

#### <きんぎょがにげた>

きんぎょが一ぴき、金魚鉢からにげだした。どこににげた？カーテンの赤い水玉模様の中にかくれてる。おや、またにげた。こんどは鉢植えて赤い花のふり。おやおや、またにげた。キャンデ  
イのびん、盛りつけたイチゴの実の間、おもちゃのロケットの隣……。ページをめくるたびに、  
にげたきんぎょが、どこかにかくれています。子どもたちが大好きな絵探しの絵本です。



<切手のデザインについて>

(1) 五味太郎氏が本切手のため 40 年ぶりに描きおろした、切手オリジナルデザイン。-



(2)~(10) 背景は、1977（昭和 52）年発行『きんぎょがにげた』  
（「こどものとも年少版」1977（昭和 52）年 6 月号）（福音館書店）の各場面から。



※五味太郎

1945（昭和 20）年、東京都生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。子どもから大人まで幅広いファンを持ち、著作は 450 冊を超える。サンケイ児童出版文化賞、路傍の石文学賞など数々の賞を受賞。海外で翻訳されている作品も多数ある。

<絵本に込められたメッセージ>

「きんぎょが にげた」発刊から 40 年。  
込めた思いは、『受け身ではなく、自分で考え続けて生きること』



# ぐりとぐら

絵本の世界シリーズ第3集 2019.1128

凸版印刷株式会社製  
 令和元年11月28日  
 ■ ● ▲ ▼ ◆

**絵本の世界** シリーズ 第3集  
 The World of Children's Picture Book Series No. 3

**ぐりとぐら**  
 なかがわりえこ と おおむらゆりこ



出版社 福音館書店  
 なかがわりえこ 作 / おおむら ゆりこ 絵  
 初版年月日：1967年01月20日

## <「ぐりとぐら」の誕生>

「ぐりとぐら」が生まれたのは1963年。はじめはお母さん・お父さん向けの雑誌「母の友」で、読み切りのおはなしとして登場しました。その時のタイトルは「たまご」です。その年の12月に、月刊絵本「こどものとも」(93号)で絵本「ぐりとぐら」が登場し、「ぐり」と「ぐら」はたちまち人気者になりました。

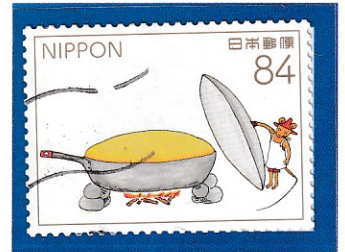


<切手のデザインについて>

(1)「ぐりとぐらのえんそく」(初版:1979年4月1日)



(2) ~ (5)、(7)、(8)「ぐりとぐら」(初版:1963年12月1日)



(6)「ぐりとぐら 絵はがきの本」

(初版:2005年11月10日)



(9)「ぐりとぐら うたうた12つき」

(初版:2003年10月15日)



(10)「ぐりとぐらかるた」

(初版:1984年8月25日)



※ 中川 李枝子

北海道生まれ。保育園に勤務のかたわら、創作。1962年に出版された童話「いやいやえん」(福音館書店)は、厚生大臣賞、サンケイ児童出版文化賞などを受賞。主な著書「かえるのエルタ」、「ももいろのきりん」、「らいおんみどりの日ようび」(福音館書店)。東京在住。

※ 山脇 百合子

東京都生まれ。上智大学卒業。高校3年生のときに「いやいやえん」に挿絵を描いたのがきっかけで絵本作家に。姉・中川李枝子とのコンビで、絵本「ぐりとぐら」シリーズなどの絵を手がける他、文・絵とも自作の作品も多数。

<「ぐりとぐら」とは>

いつも仲良しで、お料理することと食べるのが大好きな2ひきの野ねずみ。野菜作りが得意なナチュラルリスト。ふたりはきょうだい?ともだち?・・・じつは、ふたごの男の子!!

「ぐりとぐら」の誕生

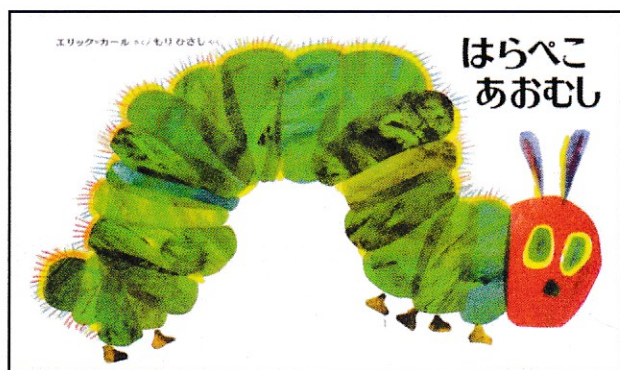
1963年。はじめはお母さん・お父さん向けの雑誌「母の友」で読み切りとして登場。その時のタイトルは「たまご」。その年の12月に、月刊絵本「こどものとも」(93号)で絵本「ぐりとぐら」が登場し、たちまち人気者に。



# はらぺこあおむし

絵本の世界シリーズ第3集 2018.11.30

The World of Children's Picture Book Series No. 2  
**絵本の世界** シリーズ 第2集  
 平成30年11月30日  
 凸版印刷株式会社製造  
 エリック・カール さく



出版社：偕成社  
 初版発行：1969年6月3日  
 著者：エリック・カール  
 挿絵：エリック・カール  
 訳：もり ひさし

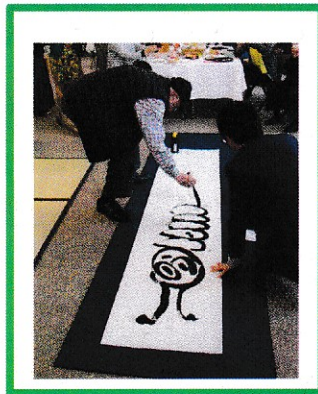
<はらぺこあおむしのおはなし>  
 にちようびのあさうまれたちっぽけなあおむしは、おなかがぺっこぺこ。  
 げつようびにはりんごをひとつ、かようびにはなしをふたつ……。  
 たくさんたくさんたべて、ふとっちょになったあおむし。さなぎになって、さいごはうつくしいちようちょにへんしんします。



<切手のデザインについて>

本切手のための、切手オリジナルデザイン。

エリックカール来日



1976 (昭和 51) 年日本において発行された

「はらぺこあおむし」(偕成社)

の各場面からデザインしている。



エリック・カール (Eric Carle)

1929年アメリカのニューヨーク州に生まれドイツで育つ。シュツットガルトの美術アカデミーを卒業後、アメリカに戻り、グラフィックデザイナーとして活躍。1968年に絵本「1、2、3 どうぶつえんへ」(ボローニャ国際児童図書展グラフィック大賞)を発表して以来、世界中で親しまれる絵本作家となる。

**愛される理由 1: 希望に満ちたストーリー**

『はらぺこあおむし』のストーリーは、わかりやすくシンプルです。毎日たくさんの食べものを食べて大きくなり、最後にうつくしいちょうちょになるという成長物語に、子どもたちは自分が大きくなることを重ねあわせ、しぜんと希望を持つことができます。

**愛される理由 2: おいしそうな食べ物、ゆたかな色彩**

絵本に登場する食べ物は、どれもとってもおいしそう。りんごやいちごなど、身近なくだものもあれば、ケーキやアイスクリームといった子どもの大好きなおかし、ピクルスやさくらんぼパイなど、あまり食べなれないような食べ物もあります。それらをどんどん食べていく姿は、子どもたちの夢を叶えてくれているようです。エリック・カールならではの、あざやかな色合いも魅力。



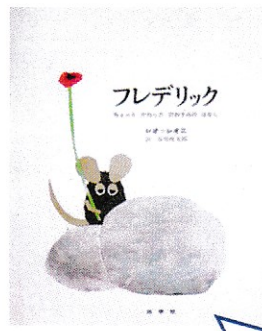


Copyright © 2020 by Blueandyellow, LLC Licensed by Cosmo Merchandising

令和2年11月27日 Cartor Security Printing



小さな黒い魚スイミーは、広い海で仲間と暮らしていました。ある日、仲間たちが大きな魚にみな食べられてしまいました。一匹だけ残ったスイミーは・・・



仲間の野ねずみが、冬に備えて食料を貯えている夏の午後、フレデリックだけは何もせず、ぼんやり過ごしておりました。寒い冬がきて、フレデリックは・・・



ねずみのアレクサンダは、子供達にちやほやされる玩具のぜんまいねずみがうらやましくて仕方ありません。しかしある日、その玩具はゴミ箱に捨てられていたのです・・・



<切手のデザインについて>

絵本の各場面からデザイン (好学社発行)

(1)「スイミー」(初版:1969年)



(2)「フレデリック」(初版:1969年)



(3)「アレクサンダとぜんまいねずみ」(初版:1975年)



※レオ・レオニ

1910年5月5日、オランダ生まれ。イラストレーター、グラフィックデザイナー。ヨーロッパやアメリカで活躍し、1999年にイタリアのトスカナで亡くなる。「スイミー」「フレデリック」「アレクサンダとぜんまいねずみ」3作品で「カルデコット賞」(注)を受賞。レオ・レオニの世界を表現している。日本では1977年から小学校2年生の多くの国語の教科書に掲載、親しまれている。…(注)「カルデコット賞」:アメリカ出版の絵本で最も優れた絵本に授与

<レオ・レオニの世界>

子どもの感性を刺激する「レオ・レオニ」の世界〜アートと哲学がつまった傑作3選〜

【魅力1:アート性の高い絵】

水彩、色鉛筆、コラージュなど様々な手法を駆使。味わい深く、自然な色調。ねずみやさかなの愛嬌は子どもの想像力を刺激し心を掴んで離さない。初めて絵本に抽象表現を取り入れた。

【魅力2:読むたびに深まっていく世界観】

最大の特徴は彼の人生哲学が潜んでいる。深いメッセージが込められた印象的な言葉、ほんわか優しい気持ちになる。3冊の絵本に魅力が集結。

- \*『スイミー』=「主体的な生き方」というテーマのほかに「友情」というテーマもある
- \*『フレデリック』=集めた「光」や「色」や「ことば」を語ると、目を閉じて聞く仲間たちの心はどんどん癒され満たされる。“物質的な豊かさ”だけではなく“心の豊かさ”の大切さを考えさせてくれる。
- \*『アレクサンダとぜんまいねずみ』=「おまえはだれに、それともなにになりたいの？」



# しろくまちゃん の ホットケーキ

絵本の世界シリーズ第5集 2021.11.26



絵本の世界 シリーズ 第5集  
The World of Children's Picture Book  
Series No. 5

しろくまちゃんのほっとけき  
わかやまけん



凸版印刷株式会社製

令和3年11月26日



出版社：こぐま社  
著者：わかやまけん、森比左志、わだよしおみ  
初版年月日：1972年10月15日

<しろくまちゃんのほっとけき>  
『こぐまちゃん』は、わかやまけんの絵でこぐま社から発行されている絵本シリーズである。主人公はこぐまちゃん、友達にしろくまちゃんがいる。円・楕円や四角などを多く用いた、単純で明確な絵と子供に親しまれやすくわかりやすいストーリーが特徴。しろくまちゃんはお母さんとホットケーキ作りに挑戦！読んで楽しい、作って楽しい、子どもの楽しみが詰まった絵本



<切手のデザインについて>

1972年に発行された『しろくまちゃんのほっとけーき』（こぐま社）の各場面からデザイン。



ぽたあん、どろどろ、ぴちぴち、ぷつぷつ……

※わかやま けん

1930年、岐阜市に生まれる。グラフィックデザインの世界から、絵本の世界に入る。淡い詩情豊かな画風の『きつねやまのよめいり』で、第16回産経児童出版文化賞推薦。また、明快な線と鮮やかな色で幼児の生活を描いた「こぐまちゃんえほんシリーズ」は、幼い子どもたちに圧倒的な人気を得ている。

<『しろくまちゃんのほっとけーき』のおはなし>

卵を割って、牛乳を入れて……。お母さんと一緒にホットケーキを作るというシンプルなお話。特に、ホットケーキをフライパンに流し込んでからの美味しそうな表現。『ぽたん どろどろ ぴちぴち ぷつぷつ やけたかな? まだまだ』絵本の余韻をいっぱい残し、心が満腹になれる絵本。

見開きいっぱい描かれたホットケーキの焼ける場面は、子どもたちに大人気。「ぽたあん、どろどろ、ぴちぴち、ぷつぷつ……。」

この絵本の魅力を最大限に引き出す方法は、実際にホットケーキを作ってみること。しろくまちゃんのホットケーキ作りと比較しながら作ってみると、絵本の世界が現実には飛び出してくるようになる。

絵本の中の美味しそうなホットケーキが、実際に目の前で焼き上がっていくと、感動や喜びもひとしお。



# くまのがっこう

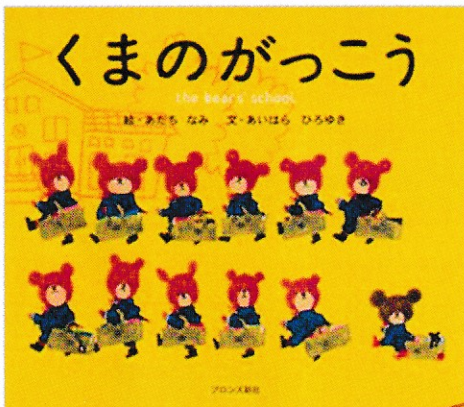
絵本の世界シリーズ第6集 2022.12.6



絵本の世界 シリーズ 第6集  
The World of Children's Picture Book Series No. 6

くまのがっこう  
絵・あだちなみ 文・あいほら ひろゆき  
©BANDAI

Philaposte  
令和4年12月6日



2002年8月初版発行

## 「くまのがっこう」主人公



ジャッキー  
**Jackie**

「くまのがっこう」の主人公ジャッキー。いちばんお子びさんだけど、おにいちちゃんたちのお母さん代わりにするしっかりもの。ときどきは「あ〜ん」と大泣きしてしまうこともあるけれどおませでおしゃれな女の子です。

絵本の中で毎日を元気に暮らすくまのこたちの姿。それぞれの時間を過ごしている日常の風景が描かれています。やさしいおにいちちゃんくまのこたちと、いたずらできかんぼうなおんなのこジャッキーがくりひろげる、なんでもないけれどあったかい1日のお話です。くまのがっこうのくまのこたちは、ぜんぶで12ひき。12ばんめ、たったひとりの女の子がジャッキーです。

切手は窓の形で表現され、さまざまに楽しんでいる様子は、一枚の絵としても美しいものとなっています。



<切手のデザインについて>



(1) ディッキー (2)チッチ (左)・ウーリー (右) (3)マックス (4)ピッピ (上)・アルバート (下)



(5) トフィー(左)とハリー (右) (6) アントン



(7)ヘルマン (左)・ペーター (右) (8) ミー (上) とロイ (下) (9) チャッキー (左)・ジャッキー (右) (10) ベルナル

\*絵・あだち なみ

多治見市生まれ。

小泉保育園卒園。

・夢は、切手をつくること

・本シートは「くまのがっこう」

の作家あだち先生による、

本切手のための描き下ろし。

\*文・あいはら ひろゆき

仙台市生まれ。

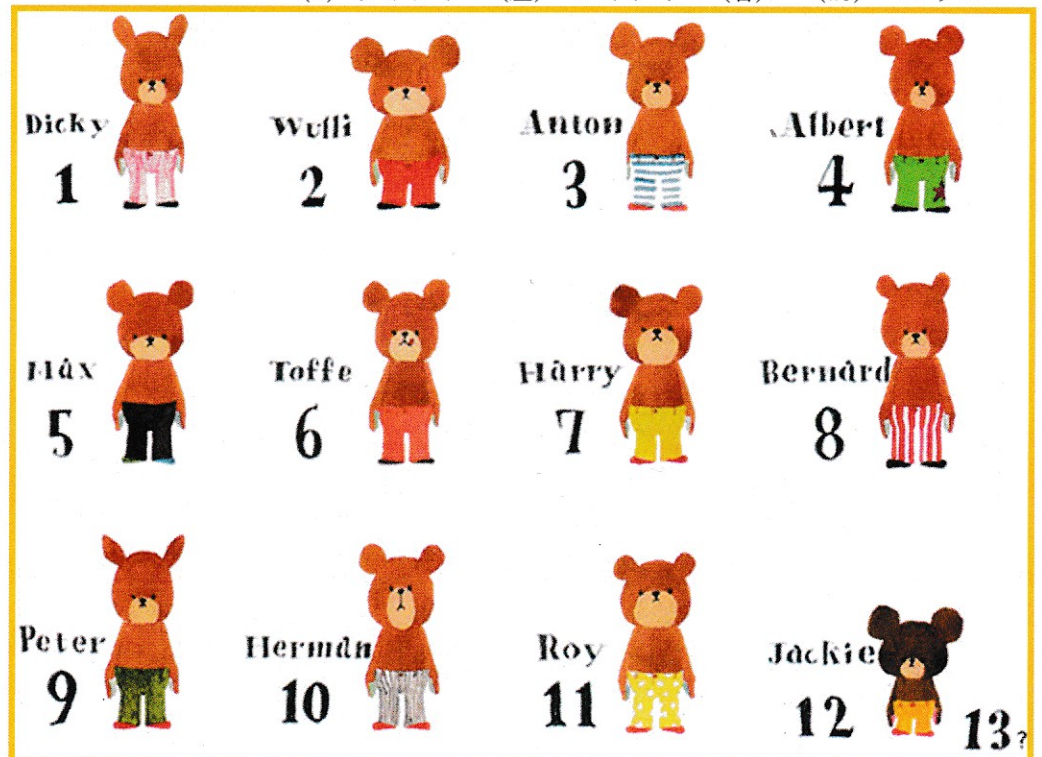
聖ドミニコ学院幼稚園卒園。

・夢は、サッカー選手になること

・あいはらさんは、お子さま

誕生をきっかけに

「くまのがっこう」創作。





# 季節のおもいでシリーズ 第4集

発行：2014（平成26）年11月20日（木）

季節感のある昔懐かしい思い出を題材としたシリーズの第4弾

## 季節のおもいでシリーズ【第4集】

# 冬

Season's Memories In My Heart Series No.4

原画：山脇 百合子



① ②





③ ④

⑤ ⑥





⑦ ⑧

⑨ ⑩



①「ぐりとぐらの1ねんかん」  
 ②「このゆきだるまだ一れ？」  
 ③⑨⑩「ぐりとぐらのうたうた12つき」  
 ④「ぐりとぐらのおきやくさま」  
 ⑤～⑧「ぐりとぐらかるた」  
 <背景画>「ぐりとぐらの1ねんかん」

絵本作者  
 ①③～⑩ 中川 李枝子 文 / 山脇 百合子 絵  
 ② 岸田 衿子 文 / 山脇 百合子 絵

JOH. ENSCHEDÉ STAMPS  
平成26年11月20日



背景：「ぐりとぐらの1ねんかん」より。新年にぐりとぐらが散歩するシーン



ぐりとぐらの1ねんかん



誕生月をは？今月は何かな？いろいろな楽しみ方をしているうちに絵本に登場する植物と仲良くなれる。月刊絵本「こどものとも」500号を記念企画。



このゆきだるまだ一れ？



あれ？見たことのない雪だるま！声に出すとうれしくなる言葉のリズム おもわず笑みが浮かぶ絵。動物たちのファッションにご注目。



ぐりとぐらのうたうた12つき

ぐりとぐらの豊かな一年間の暮らしを描いた絵本



ぐりとぐらのおきゃくさま

ぐりとぐらが雪の上の足跡を辿ると…



ぐりとぐらかるた(

5) 「い」の絵札。

「いちごがいっぱい おいしそう」



(6) 「も」の絵札。

「もうできたかと もいちどのぞく」



(7) 「ふ」の絵札。

「ふとってふくらむ ふうふうおもち」



(8) 「あ」の絵札。

「あおいぼうしあかいぼうし ぐりとぐら」



## 「ピーターラビット」 絵本シリーズ

英国作家、ビアトリクス・ポーターが1893年知人の病気の息子、ノエル少年に送った「絵手紙」から誕生。

ピーターラビットをめぐる一連の物語を通じて、

ポーターが、幼い読者に伝えたい事。

『大人の世界に潜む現実的な危険と、行動を起こせばそれなりの責任や結果が伴うということ。』



## 「うさこちゃん」 絵本シリーズ

オランダのグラフィックデザイナーであり絵本作家、ディックブルーナーが描く絵本シリーズ。

ブルーナーのこだわり「シンプルであること」。

それはフランスの画家マティスから大きな影響を受けたどoringいた、揺るぎない彼のこだわり。

- ・赤=嬉しさ、幸せ。黄=あたたかさ。緑=伝えたいことを伝える。青=怖さ、寒さ、悲しさ、不安。



ブルーナーが伝えたい事

「子どもたちには、いろいろ知ってもらいたいし、多くのものを感じてもらいたいのが押しつけるのは好きではないし、教えるという視点に立つことも嫌う。なぜなら、子どもたちが自分のイマジネーションを使って、自然に吸収していくのがいちばんの学び方だと思うから」

## 「リサとガスパール」 絵本シリーズ

フランス・パリのアトリエにて、アン・グッドマン（文）\*ゲオルグ・ハレンスレーベン（絵）夫妻によって作られた絵本シリーズ。

夫妻が伝えたい事

『リサとガスパール』の物語はどれも結末が「ここで終わるの？このあとどうなるの？」と、意図的に続きを感じさせるような結末。子ども達にとっては、絵本の結末が望んだ通りの終わりでないこともあるので、余韻の残した結末の方がいい。

- ・アン・グッドマン曰くー

「子どもの頃の失敗は覚えているが、その後のことは覚えてなかったり、また同じことをして怒られたり。

余韻のある終わり方だからこそ、自分の子どもの頃と共感できる。多くの絵本や物語には教訓があるが、この絵本にはない。」 リサもガスパールもいつもたくさん失敗をするけれど、そこから何も学んでいない(笑)。

